

町民文芸



只見短歌会

令和六年八月詠草

車窓より眺む朝霧さわやかと通院我れの心のみぬ

関谷登美子

初成りの小さき茄子を供へより下げて夫との夕餉となりぬ

目黒 富子

二歳児が小さな口でスイカ食む甘きとこだけしやくしやくと

立花 奏音

宿題は筋トレよりも疲ると小三の孫溜め息をつく

新国由紀子

藍染めに白き刺し子の貼られたる葉書に便りを久しき友へ

渡部ヨリ子

只見俳句会

八月定例会

日高俊平太 指導

通学児ふらりゆらりと炎天下
何鳥かつつくしぐさよ麦の秋

睦子

藤の実の風にふれあう広場かな
かじか鳴く小唄うまれし川あそび

礼

猪の荒す田圃は村はずれ
西空やソバの絨毯じゅうたん赤く染め

一穂

梅雨の雷運ぶ刈草重くせり
初きゆうり遠方からの堆肥足し

修一

戦死の報泣き崩れし祖母の夏
遠き日の蝉時雨の夕まぐれ

信

梅雨月や母のかたみの手まりかな
子供等の昼の賄夏料理

都

薔薇手入れ蜂に刺されてしまけり
先代の植えしブナの木池を被う

真理子